http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.446　18/11/22

意義深い文章たち

「日ごと寒さがつのります～♪」が分かるのはおとーさん・おかーさんだろうが（笑）、だんだん冬らしくなってきた。学校帰りに塾や予備校を活用している人は、帰りがけの気温はかなり低下しているので、しっかり防寒対策をとって体調管理に気をつけよう。社会人になっても思うことだが、体調管理はやはり基本中の基本である。誰でも病気にはなるわけだが、日常の様子を見ていれば、「こりゃ病気にもなるわ」という人もいるし、「病気とは珍しい、よっぽど調子が悪い？」と思われる人もいるわけで、ぜひ後者のような評価を得られるようになりたいものだ。

ところで、最近は受験勉強（受験校の決定）に関心が行きがちだが、来月の３日からは後期中間考査である。これをしっかり受けないと、最悪、卒業見込みがたたない＝調査書が発行できない、ということになって、６日に申請してもらう調査書が、補習が終わるまで（最悪１月末くらいまで）手に入らない、つまり、大学に出願できないという事態にならないとも限らない。だから、考査の準備もしっかり進めること。

＊

ところで、今回の現代文の「ちくま評論選」についていうと、考査範囲に入っている６本の評論のうち、２本が東大の過去問として出題されたものである。一つは永井均さんの「幸福の青い鳥」で、2002年に第四問として出題されており、範囲もほぼ同じである。もう一つは西谷修さんの「死の再定義」で、これは1998年の第一問に、ほぼ同趣旨の文章が出題されている。だから、もし東大の過去問を演習していて、「25年」みたいな問題集をもっている人がいたら、まずはそちらからチャレンジしてみるとよいだろう。ちなみに、「幸福の青い鳥」の方は超難問である。

考査範囲の残りの４本であるが、一つは２年生の時に学習した「「である」ことと「する」こと」の著者であり、戦後日本最高の知性といっても過言ではない丸山真男さんの「幕末における視座の変革」。佐久間象山の政治思想に関する話で、途中に古文の引用があるからちょっと読みづらいが、論理明晰で面白い。法学部に進みたい人や、将来政治家を目指す人はぜひ読むべきであろう。もう一つは、丸山真男さんと並ぶ戦後の知の巨人、藤田省三さんの「「安楽」への全体主義」。現代日本社会の精神的状況状況が的確に分析されていて説得力がある。小論文に備える意味でも、ぜひ読んでおきたい文章だ。３本目は、東大哲学科教授として、独時の哲学世界を打ち立てた大森荘蔵さんの「「後の祭り」を祈る」。これは時間について取り扱った抽象的でちょっと難しめの文章だが、論理を展開を追う練習にぴったりである。余裕のある人は、「幸福の青い鳥」で採り上げられている「考古学」と関連させて思考を深めてみよう。最後は、石原吉郎さんの「確認されない死の中で」。シベリアの強制収容所を生き抜いた詩人の名文である。「百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計だ」という、ジェノサイドの責任者アイヒマンの言葉で始まるこの文章は、人間のあり方を考える上で、考査がなくてもぜひ読んでほしいものである。

というわけで、なかなか手強いが、意義深い文章たちなので、ぜひしっかり挑戦を。